

阿辻哲次著『漢字學』『說文解字』の世界』（東海大學出版會、一九八五年）

『說文解字』とは後漢の學者許慎によって記された、最古の字書とも言われる漢字學の基本資料であるが、本書はその平易かつ詳細な解説書である。

本書の内容は大きく二部に分かれる。第一部は「序論Ⅱ漢字と中國二千年の文字學Ⅱ」「說文解字Ⅱ前史Ⅱ實用的文字學の時代Ⅱ」「說文解字Ⅱの背景Ⅱ許慎とその時代Ⅱ」「說文解字Ⅱ文字の體系化とその手法Ⅱ」「說文解字Ⅱの構成Ⅱ文字のコスモロジーⅡ」の五章によって構成され、許慎の記した『說文解字』についての解説・考察を論じている。第二部では段玉裁『說文解字注』論として『說文解字注』の背景Ⅱ段玉裁とその時代Ⅱ』『說文解字讀』と『汲古閣說文訂』Ⅱ『說文解字注』への道程Ⅱ』『說文解字注』の方法Ⅱ』『段注』を読むためにⅡの四章を通じ、現在最もポピュラーな『說文解字』注釋である、清代の段玉裁が記した注（段注）について解説を加える。第一部・第二部の論を併せることで『說文解字』という一冊の書物への理解が深まるようになっていく。

第一部「序論」では概説として現在に至る漢字學の流れを述べ、「前史」では秦から前漢にかけて成立した『蒼頡篇』『急就篇』を通じ、前漢における漢字學が官吏登用のための實學本位のものであったことを指摘する。「背景」では前漢末から後漢に發生した今文派と古文派の學問的な對立を通じ、許慎の思想的な背景や『說文解字』がその時

代に記された意義を明らかにしている。

具體的な『說文解字』本文の解説は第一部の後半二章にまとめて記される。漢字の構造ごとの分類である六書（象形・指事・會意・形聲・假借・轉注）や、現代の字書にも繼承される部首法に對して詳細な解説を行っており、『說文』に限らず漢字學を學ぶ上での基礎的な知識を得ることが出来るが、そこでも筆者が重視するのは分類の正確性そのものではなく許慎の思想哲學である。

現代では許慎が材料とした小篆・隸書だけでなく更に古い時代の文字である金文・甲骨文を参照することが出来るようになり、『說文』の字釋の誤りも多く判明しつつある。しかし實學的な字典としての利便性・正確性だけではなく、漢字學の發展史における『說文解字』の意義、書物自體の價値に筆者は著目し、考察を加えているのである。

第二部の段注解說においても段玉裁の卓越した業績を理解するため、「方法」での段注それ自體の解説に加えて、段玉裁の事跡や『注』を記すに至る研究過程、また許慎から段玉裁の時代までを繋ぐ『說文』および上古音に對する研究の歴史についても説明を行っている。終章の「讀むために」では現在入手可能な『說文』關係の書籍を紹介し、これから研究を始める者に對して便宜を圖っている。（齋藤加奈）